

令和8年度豆類需給安定会議、令和8年度豆類産地懇談会 第72回豆類生産流通懇談会の開催について

豆類の生産・流通・加工等に関係する者が一堂に会し、主産地十勝の作柄を調査するとともに、今後の豆類の需給状況に関する情報・意見を交換し、道産豆類に対する理解をより一層深め、豆類の生産・流通の安定と消費の維持・確保を図ることを目的として、(公社)北海道農産基金協会、全国豆類振興会及び北海道豆類振興会の3者の共催により、令和8年度豆類需給安定会議、令和8年度豆類産地懇談会、第72回豆類生産流通懇談会の合同会議が9月3日(木)に北海道帯広市で開催されました。

1 現地作況調査

会議の開催に先立って、まず、午前中に十勝農業試験場(芽室町)及び帯広市のほ場で小豆、大豆、手亡及び金時の生育状況の現地調査が実施され約40名が参加しました。

(1) 十勝農業試験場(小豆、いんげん、手亡、大豆)

(2) 帯広市富士町 牧村氏ほ場(小豆、金時、手亡)

今回の調査では十勝農試ほ場を視察し、担当研究員から説明を受けました。また、牧村氏ほ場では、牧村氏及び十勝農業改良普及センターの担当者から作柄の説明を受けました。



2 合同会議

午後からは、ホテル日航ノースランド帯広において、合同会議が開催され、豆類の生産・流通・加工業界・行政・試験研究等の関係者約70名が出席しました。



(1) 来賓挨拶

主催者挨拶の後、来賓の農林水産省農産局穀物課道端係長から挨拶も兼ねて、豆類の需給・生産・流通の現状、新品種や安定供給に向けた取り組みなどについて説明がありました。

(2) 話題提供

本年産の豆類の生産状況、需給動向、試験研究動向などについて、次のとおり話題提供が行われました。

- ① ホクレン農産部雑穀課から本年産の道産小豆の作付面積は指標面積を上回る見込み、いんげんの作付面積は横ばい、新品種「秋晴れ」の導入が進み、例年作以上が期待できる。
一方、収穫期の降雨など気象条件による生産への影響が懸念されとの説明がありました。
- ② 雑穀輸入協議会及び関西輸入雑豆協会から輸入豆について次のとおり説明がありました。
カナダオンタリオ州では大規模火災の影響もなく、小豆、手亡とも順調に生育し、日本向け小豆の供給に問題はない。との説明がありました。
中国産小豆について、今年は良くない。作付面積が大幅に減少。現状のまま推移すれば生産量は前年の半分程度になる可能性。
- ③ J A本別町、J A音更町、J A女満別町から各地域の作付け状況や生育状況について次のとおり報告がありました。
十勝地域では、いんげんの作付面積は新品種「秋晴れ」の導入で作付面積低下が止まっている状況。
小豆、いんげん、大豆は概ね平年並みの収量が見込まれるとの見通し。
オホーツク地域でも作付けは増加しているものの、お盆以降干ばつ気味で粒は小さめだが品質はまずまず、収量は平年並みからやや下回る見通しとの報告がありました。
- ④ 十勝農試豆類畑作グループから機械収穫への適正、収量性、病害抵抗性、加工適正などを重視した豆類の育種について次のとおり説明がありました。
小豆ではコンバイン収穫時のロスを減らすため着莢位置を高くした「きたいろは」や、多

収・大粒・加工適正を目指す有望系統などが試験されている。

菜豆では「秋晴れ」や「舞てぼう」等の品種の紹介や白金時「十育 E14 号」の品種化に向けた検討が進められている。

近年の高温・干ばつへの対応として、かん水試験、雨よけ処理試験、人工気象装置を用いた高温試験も行い、生育への影響や品種間差を調査している。との説明がありました。

また、リスク分散の手法として遅播きについても質疑がありました。

(3) 意見交換

全国豆類振興会藪広報委員長をコーディネーターとして意見交換が行われました。

意見交換で出された主な意見は次のとおりです。

【実需者から見た豆類の需要・消費】

- ・ 物価上昇や節約志向により販売量など厳しい状況が続いている。生産者の希望する価格をそのまま製品価格に反映することは容易ではない。
- ・ 一方、価格上昇の影響を小豆だけに求めるのではなく、エネルギー費、包材費、人件費など食品全体のコストが上昇していることを踏まえて、最終的な販売価格を考える必要がある。
- ・ 「秋晴れ」と「大正金時」品種や消費者の評価、黒大豆原料の不足への懸念について意見があった。
- ・ 60 kgの小豆が1万円値上がりした場合でも、砂糖や水を加えて製品になると総重量は増えるため、最終商品の1個当たりの価格への影響は比較的小さいとの具体例が示され、原料価格の上昇分を適切に価格転嫁していくことが重要。
- ・ 輸入小豆は北海道産を補完する位置付け。品質基準を明確にして、供給体制を整えている。
- ・ カナダにおいては契約栽培による安定供給や中国など調達先の多様化にも対応している。

【生産者が再生産できる価格の必要性】

- ・ 人手不足が深刻になる中、豆類の安定生産を維持するには、生産者が将来も作り続けられる価格を確保することが重要との問題提起があった。
- ・ 「豊作になると価格が下がり、不作になると価格が上がる」という価格変動があったが、不作時は収穫量自体が減るため、価格が上がっても生産者手取り収入が増えない。結果として生産者にとっては豊作でも不作でも厳しいという状況になる。豊作の年であっても、生産意欲を失わない程度の価格を維持することが必要。
- ・ 生産者が意欲を持って生産を継続するためには、生産コストを踏まえた価格形成が必要であり、市況の変動だけに左右されない取引のあり方が重要。

【安定供給と価格の安定を両立する必要性】

- ・ 小豆は豊作・不作によって価格が大きく変動しやすく、実需者にとっても「安定して確保できるかどうか」が原料選択の重要な条件となる。
- ・ 価格については「豊凶」に価格変動だけに頼るのではなく、一定の基準となる価格を意識しながら、複数年契約なども活用して安定した取引につなげることが重要。
- ・ エリモショウズのように消費者・実需者から根強い評価を受けている品種については、その価値や生産コストを価格に反映させても良いのではないかと意見があった。
- ・ 品種によって価格差を設けることについては、現段階では実需者の理解が得られているわけではないとの意見があった。

【今後の方向性について】

- ・ 生産者が安心して豆を作り続けられる環境を整えることが、加工・流通・消費のすべてを維持する前提であるとの認識を共有した。
- ・ 生産者側だけでなく、流通関係者、実需者、消費者がそれぞれの立場で生産コストや生産現場の実情を理解し、適正な価格形成につなげてゆくことが重要。
- ・ 「生産を続けられる価格」と「消費者・実需者が受け入れられる価格」の両立を目指す必要性について、参加者間で認識を共有した。